

最優秀

ぼくはお兄ちゃん

新見市立本郷小学校

六年 妹 尾 悠 生

僕には小学校三年生の妹がいる。妹が生まれた時、自分がお兄ちゃんになったことがうれしくて、「悠生」と名前で呼ばれると、

「悠生じゃない。春奈のお兄ちゃんっていうて。」
と言っていたらしい。

その妹は、僕と同じ学校に通っていない。妹は障害があつて、近くの特別支援学校に入学した。それまでは、僕が妹を連れてスクールバスに乗り、いっしょに学校に行けると思っていたから、少し残念な気がした。

初め、僕は、妹がなぜ同じ学校に行かないのか不思議だった。しかし、だんだんと理解できるようになった。妹の機嫌が悪くなると家族は大変だ。物をばらばらにこわしたり、危険なことをしてしまったりするから、目にはなせない。

そんなある日、ふと妹の姿が見えなくなった。家族で一生懸命探した。大声で名前を呼びながら、必死で探した。僕は、泣きながら家の周りを何度も何度も探した。不安で押しつぶされそうだった。すると、車の中でくつろいでいる妹を兄が見つけた。僕は安心してもっと泣いた。もうど

こにも行かないよう、僕がずっとそばにしようと思った。そんな妹が今年、三年生になり、寄宿舎に入るようになった。その準備をしている母は、どこか悲しそうな顔をしていた。僕も手伝ったけど、妹のことが心配でたまらなかつた。

「春奈、いつでも帰ってきてええで。」
これが父の口ぐせになった。

始業式の日、妹はいつもと変わらず登校し、帰ってこなかった。妹がいないと、家の中がとても静かで、やりたいことができた。久しぶりに兄弟の中で一番下になって、甘えることもできた。でも、心の中にぽかんと穴が空いたような気がした。

週末になり、妹が帰ってきた。

「悠生兄ちゃん、春奈、帰ってきたよ。」

と、いきなり抱きついてきた。僕も、

「春奈、お帰りー！」

と言つて抱きしめた。やっぱり妹がいる家がいい。妹は、一人で寝て起きて、右半身が不自由なのに、一人で服を着る。洗濯物も自分で干すらしい。僕の妹は本当にすごい。左手だけで何でもやろうとする。そして、できてしまう。とにかくがんばり屋だ。しかも甘え上手でもある。だれに甘えればいいのかよく分かっていて、まず僕に甘えてくる。妹に言われたら、つい聞いてしまう。頼りにされるのがうれしいのだ。

妹は障害があつて、不便なこともあるだろうけど、自分の力でしっかり生きていこうとがんばっている。僕はいつまでも頼りになる兄であるために、しっかりと自立し、妹を支え守って行きたい。

もうすぐ夏休みが終わり、妹は寄宿舎へ行く。またさみしくなるなあ。